



地人館

宮沢賢治研究会 The Miyazawa Kenji Society

[評釈] 宮沢賢治短歌百選 編集委員会

編集委員長 大島丈志

編集委員 村上英一・大角 修・坪谷卓浩・松岡康子

ひょうしゃく みやざわけんじたんかひやくせん
[評釈] 宮沢賢治短歌百選

みやざわけんじけんきゅうかいへん
宮沢賢治研究会 編

初版発行 2023年8月31日

発行 ちじんかん 地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7939

<http://chijinkan.com/>

©2023 The Miyazawa Kenji Society

はじめに——宮沢賢治の短歌について

宮沢賢治研究会では、会誌『賢治研究』が令和五（二〇二三）年八月に一五〇号の刊行を迎えることを記念し、また、これまで年6回、奇数月の第一土曜日に実施する読書会で賢治の短歌を読み続けてきた成果を形にすることを目的として、『評釈』宮沢賢治短歌百選』を出版することとしました。

宮沢賢治というと、詩人、童話作家のイメージが強いと思いますが、賢治の文学活動の出発点は短歌でした。賢治は、明治四十四（一九一一）年一月、十四歳（盛岡中学二年生）の頃から短歌の創作を始め、二十四歳で上京中の大正十（一九二二）年四月頃まで短歌を制作しています。大正九、十年頃から童話、大正十一年頃から口語詩の創作が始まり、短歌の制作はほぼ終息しますが、その後も賢治は、短歌の推敲や改作を続け、また、絶筆の二首など若干の短歌を作成しています。

賢治は、盛岡高等農林学校の在学中に日記代わりに短歌を書いていたと言われていますが、そのときの原稿（ウル原稿）は残されていません。ウル原稿をもとに、賢治の短歌を整理して浄書したものとして、「歌稿A」「歌稿B」と呼ばれる二つの歌集（歌稿）が現存しています。

「歌稿A」は、表紙に「歌稿／明治四十四年 ヨリ／大正九年春 マデ」と書かれ、その時期を題材とした短歌が全て一行書きで記載されています。主に妹のトシが筆写したもので、一部に妹シゲと賢治自身の筆写した箇所があります。大正九年夏頃に成立した（筆写された）と推測されています。「歌

稿A」の裏表紙には、「岩手県平民／宮澤賢治／二十五才」と書かれています。

「歌稿B」は、第一葉に「歌稿」「明治四十四年一月より」などと記入され、「歌稿A」と同じ時期を題材とした短歌に「大正十年四月」の短歌群を加えたものが、多くは多行書き（行わけ、分かち書き）で書かれています。賢治自身が「歌稿A」をもとに浄書したもので、大正十年秋頃から大正十一年の秋頃までに成立したと推測されています。

『新校本全集』では、「歌稿A」「歌稿B」の短歌に通し番号を付けており、両歌稿の同じ短歌は、同じ番号となっていますが、「歌稿A」にあって「歌稿B」には採られなかった短歌や、「歌稿B」のみに存在する短歌もあります。「歌稿A」「歌稿B」は、第一形態が成立した後も、賢治による推敲（手入れ）がなされ、削除や破棄をされた短歌もあれば、追加された短歌や、推敲過程で新たに触発され作成された短歌（派生歌）もあります。「歌稿B」では、後から、冒頭に〔明治四十四年四月より〕の短歌群が追加されています。追加歌や派生歌は、例えば歌稿B 583と歌稿B 584の間に書き加えられた場合は、歌稿B 583^a584という番号が付されています。なお、「歌稿B」では、三割近くの短歌に斜線が引かれています。削除の意の×印とは別の印かもしれないので、新校本全集では、本文末尾に〔斜線〕と記載し、削除された短歌とは区別しています。

「歌稿A」の後に「歌稿B」が成立しているため、同じ番号の短歌は、概ね「歌稿B」の方が新しい（後に書かれた）といえますが、「歌稿B」の成立後に「歌稿A」の推敲も行われているので、「歌稿A」の手入れ後の最終形態が、「歌稿B」の同番号の短歌よりも新しい場合もあります。

賢治の短歌には、「歌稿A」「歌稿B」のほかに、「雑誌発表の短歌」「書簡中の短歌」「原稿断片等

の中の短歌」があります。これらには、新校本全集で、135というような斜体の通し番号が付されています。これらの中には、「歌稿A」「歌稿B」に採られているものもありますが、「歌稿A」「歌稿B」に入っていない短歌も相当数あります。「雑誌発表の短歌」は、盛岡高等農林学校の在学中、同校の『校友会報』や同人誌『アザリア』に発表されたものです。「書簡中の短歌」は、主に『アザリア』の同人で賢治の親友である保阪嘉内宛の手紙の中に書かれた短歌です。これらは、時期的には「歌稿A」「歌稿B」よりも前のものですので、「歌稿A」「歌稿B」に採られていて異なる場合、「雑誌発表の短歌」「書簡中の短歌」の方が、ウル原稿に近いと考えられます。「原稿断片等の中の短歌」は、手帳やノート、他作品の原稿や紙片等に書かれたものです。

このほか、童話の中に書かれている短歌もあります。「歌稿A」「歌稿B」の中にある短歌が童話に書き込まれている作品（「沼森」「マグノリアの木」など）もありますが、「鹿踊りのはじまり」において鹿たちの歌う短歌などは、童話執筆に伴って新たに制作された短歌です。

賢治の短歌には、その後の童話や詩に表現される主題やモチーフなどが点在しています。前述のように、短歌がそのままの形で童話の中に書かれていることもあります。が、「烏の北斗七星」「ガドルフの百合」「原体剣舞連」など、短歌に詠まれたイメージが作品に描かれていたり、短歌をもとに改作したと思われる作品もあります。「銀河鉄道の夜」にも、ケンタウル祭や赤い腕木の電信柱など、短歌に詠まれたイメージが盛り込まれています。賢治は、晩年に文語詩を創作していますが、文語詩も短歌から改作されたものが多く、「歌稿B」には、文語詩への改作を試みた手入れの跡が

多く残されています。

賢治の短歌については、詩や童話に発展していく賢治文学の出発点としての意義を捉えられることが多く、短歌自体としては「若書き」にすぎないといった評価もあります。一方で、賢治短歌の特性や独自性などを評価して考察する動きもあります。賢治の短歌には、一般の短歌の概念に収まらない特異な感覚等もみられるので、どのように評価するかは難しいところもあります。

本書では、賢治短歌の概論や作品の良否を論じるのではなく、選出した百首の短歌について、作品の背景にある伝記的事実や、短歌に詠み込まれた仏教用語・科学用語、植物、星、岩石などの事物、童話や詩など他作品との関連等を明らかにして、作品の鑑賞に資することを目指しています。賢治の短歌に親しんでいただくとともに、賢治への理解を深めていただくための一助となれば幸いです。

令和五（二〇二三）年八月

宮沢賢治研究会会長 村上英一

はじめに——宮沢賢治の短歌について 宮沢賢治研究会会長 村上英一 2

歌稿

〔明治四十二年四月より〕

- 1 父よ父よなどて舎監の前にして（歌稿B 0_b 1） 栗原敦 16
- 2 のろぎ山のろぎをとればいたゞきに（歌稿B 0_e 1） 中地文 21
- 3 ホーゲーと焼かれたるまゝ岩山は（歌稿B 0_k 1） 李啓三 25

明治四十四年一月より

- 4 み裾野は雲低く垂れすゞらんの（歌稿B 1） 大竹智美 33
- 5 ひとつびとに／おくれてひとり／たけたかき（歌稿B 6_a 7） 栗原文子 37

- 6 中尊寺／青葉に曇る夕暮の（歌稿B 8） 大竹智美 41
- 7 まぼろしとうつつとわかずなみがしら（歌稿B 10） 大沢正善 45
- 8 黒板は赤き傷受け雲垂れて（歌稿B 32） 浜垣誠司 49
- 9 山鳩のひとむれ白くかがやきて（歌稿B 41） 石島崇男 57
- 10 凍りたるはがねのそらの傷口に（歌稿B 54） 平澤信一 61
- 11 プリキ缶がはらだ、しげにわれをにらむ、（歌稿B 59） 鈴木健司 67
- 12 風さむき岩手のやまにわれらいま（歌稿B 75） 森義真 71
- 13 うしろよりにらむものありうしろより（歌稿B 79） 山崎善男 76

大正三年四月

- 14 ちばしれる／ゆみはりの月／わが窓に（歌稿B 94） 鈴木健司 81
- 15 熱去りてわれはふた、び生れたり（歌稿A 98） 私市保彦 86
- 16 目をつぶりチブスの菌と戦へる（歌稿A 108） 信時哲郎 90
- 17 十秒の碧きひかりの去りたれば（歌稿B 111） 森義真 94
- 18 粘膜の／赤きぼろきれ／のどにぶらさがれり（歌稿B 115） 宮澤哲夫 99
- 19 雲ははや夏型となり熱去りし（歌稿A 117） 大沢正善 106

- 20 蛭が取りし血のかなだらひ／日記帳（歌稿B 121） 外山 正 110
- 21 あたま重き／ひるはさびしく／錫いろの（歌稿B 147） 宮澤哲夫 117
- 22 対岸に／人、石をつむ／人、石を（歌稿B 153） 富山英俊 122
- 23 なつかしき／地球はいづこ／いまははや（歌稿B 159） 村上英一 127
- 24 なにのために／ものをくふらん／そらは熱病（歌稿B 162） 宮澤哲夫 132
- 25 目は紅く／関折多き動物が（歌稿B 166） 大塚常樹 140
- 26 この世界／空気の代りに水よみて（歌稿B 168） 本田裕子 147
- 27 いさゝかの奇蹟を起す力欲し（歌稿A 170） 石島崇男 153
- 28 城址の／あれ草に卧てこゝろむなし（歌稿B 176） 秋枝美保 157
- 29 しやが咲きて／きりさめ降りて／旅人は（歌稿B 186） 小林俊子 162
- 30 いなびかり／またむらさきにひらめけば（歌稿B 193） 青木静枝 168
- 31 夏りんご／すこしならべてつゝましく（歌稿B 209） 秋枝美保 174
- 32 空しろく／銀の河岸の製板所（歌稿B 218） 森本智子 179
- 33 あまの邪鬼（じやく）／金のめだまのやるせなく（歌稿B 223） 村上英一 186

- 34 かゞやける／かれ草丘のふもとにて（歌稿B 231） 松行彬子 191
- 35 しめやかに／木の芽ほごるゝたそがれに（歌稿B 238） 相原勝 196
- 36 りんごの樹／ポルドウ液の霧ふりて（歌稿B 248） 栗原文子 202
- 37 本堂の／高座に島地大等の（歌稿B 255^a 256） 村上英一 205

大正五年三月より

- 38 明滅の／海のきらめき しろき夢（歌稿B 262） 李啓三 209
- 39 輝石たち／こゝろせわしく別れをば（歌稿B 268） 加藤碩一 217
- 40 浅草の／木馬に乗りて／晒ひつゝ、（歌稿B 275） 相原勝 222
- 41 ブジェー師よ／かのにせものの赤富士を（歌稿B 280^a 281） 中地文 227
- 42 かくこうの／まねしてひとり行きたれば（歌稿B 312） 構大樹 231
- 43 いまはいざ／僧堂に入らん／あかつきの、（歌稿B 319） 小田部耕二 238
- 大正五年七月
- 44 この丘の／いかりはわれも知りたれど（歌稿B 337） 青木静枝 242
- 45 うたまろの／乗合ぶねの前に来て（歌稿B 344） 杉浦静 249
- 46 この坂は霧のなかより／おほいなる（歌稿B 346） 信時哲郎 255

47 東京よ／これは九月の青りんご（歌稿 B 349） 小関和弘 259

48 ほしの夜を／いなびかりする三みねの（歌稿 B 352） 大明敦 265

49 信夫山はなれて行ける機関車の（歌稿 B 362） 小関和弘 269

50 夜の底に／霧たゞなびき／燐光の（歌稿 B 365） 宮川健郎 276

大正五年十月より

51 あけがたの食堂の窓／そらしろく（歌稿 B 366） 宮川健郎 279

52 「青空の脚」といふもの／ふと過ぎたり（歌稿 B 391） 大島丈志 284

53 いまいちど／空はまづかに燃えにけり（歌稿 B 392） 李啓三 289

54 学校の郵便局の局長は（歌稿 B 393） 構大樹 296

55 「何の用だ。」／「酒の伝票。」／「誰だ。名は。」（歌稿 B 415） 外山正 303

56 シベリアの汽車に乗りたるこゝちにて（歌稿 B 421） 小関和弘 311

57 つゝましき／白めりやすの手袋と（歌稿 B 425） 本田裕子 318

58 東京の／光の渣にわかれんと（歌稿 B 429） 相原勝 323

大正六年一月 一九一七年

59 わるひのき／まひるみだれしわるひのき（歌稿 B 435） 坪谷卓浩 329

大正六年四月

- 60 ベムベロはよき名ならずや／ベムベロの（歌稿B 453） 松岡康子 333
- 61 雲とぎす／きりやまだけの柏ばら（歌稿B 457） 坪谷卓浩 337
- 62 わがうるわしき／ドイツたうひは／とり行きて（歌稿B 461^a 462） 松行彬子 341
- 63 さくらばな／日詰の駅のさくらばな（歌稿B 473） 小関和弘 345
- 64 おきな草／とりて示せど七つ森（歌稿B 488） 須長裕子 351

大正六年五月

- 65 おきなぐさ／ふさふさのびて／青ぞらに（歌稿B 504） 小田部耕二 356
- 66 あまの川／ほのぼの白くわたるとき（歌稿B 525） 李啓三 362
- 67 豆いろの坊主となりて七つ森（歌稿B 536） 中谷俊雄 369
- 68 夜明けには／まだ間あるのに／下のはし（歌稿B 537） 大島丈志 374
- 大正六年七月より

- 69 よるのそら／ふとあらはれて／かなしきは（歌稿B 541） 大明敦 380
- 70 雲の海の／上に凍りし／琥珀のそら（歌稿B 548） 李啓三 385
- 71 岩手やま／いたゞきにして／ましろなる（歌稿B 550） 信時哲郎 392

- 72 うるはしき／海のびらうど 褐毘布（歌稿 B 560） 栗原敦 396
- 73 よりそひて／あかきうで木をつらねたる（歌稿 B 578） 正海澄恵 399
- 74 岩鐘のまくろき脚にあらはれて（歌稿 B 583^a 584） 加藤碩一 404
- 75 雲ひくき／青山つゞきさびしさは（歌稿 B 585） 須長裕子 408
- 76 うす月に／かがやきいでし踊り子の（歌稿 B 593） 伊藤卓美 413
- 77 オーパルの／雲につゝまれ／秋草と（歌稿 B 598） 加藤碩一 420
- 78 みちのくの／種山ヶ原に燃ゆる火の（歌稿 B 602^a 603） 中谷俊雄 425
- 79 けはしくも／刻むこゝろのみねみねに（歌稿 B 640） 杉浦静 429

大正七年五月より

- 80 暮れやらぬ 黄水晶シトリンのそらに／青みわびて（歌稿 B 646） 加藤碩一 438
- 81 ほしぞらは／しづにめぐるを／わがこゝろ（歌稿 B 668） 佐藤栄二 442
- 82 あゝこはこれいづちの河のけしきぞや（歌稿 A 680） 渡辺福實 448
- 83 「聞けよ」（Höre.）／また、／月はかたりぬ／やさしくも（歌稿 B 690） 梅田えりか 456
- 84 錫病の／そらをからすが／二羽飛びて（歌稿 B 704） 梅田えりか 464

大正八年八月より

85 銀の夜を／虚空のごとくながれたる（歌稿 B 719） 本田裕子 473

86 みかづきは／幻師のごとくよそほひて（歌稿 B 723） 松岡康子 479

87 サイプレス／忿りは燃えて／天雲の（歌稿 B 759） 尾崎道明 483

大正十年四月

88 杉さかき 宝樹にそゝぐ 清せいとうの（歌稿 B 763） 正海澄恵 492

89 かゞやきの雨をいたゞき大神の（歌稿 B 764） 私市保彦 497

90 ねがはくは 妙法如来正徧知（歌稿 B 775） 深田愛乃 502

91 みづうみは夢の中なる碧孔雀（歌稿 B 783） 浜垣誠司 508

92 父とふたりいそぎて伊勢に詣るなり、（歌稿 B 801） 大角修 517

93 雲ひくく 桜は青き夢の列つら（歌稿 B 810） 宮澤俊司 525

雑誌発表・書簡・原稿断片等・童話の中の短歌

94 あめつちに たゞちりほども 菩薩たち（82『校友会会報』） 杉浦静 534

95 春すぎて かがやきわたる あめつちに（83『校友会会報』） 大竹智美 543

- 96 つくづくと「粹なもやうの博多帯」(158 書簡中の短歌) 加藤碩一 547
- 97 塵点の／劫をし／過ぎて／いましこの(257〔雨ニモマケズ手帳〕) 深田愛乃 551
- 98 あはれ赤き／たうもろこしの／毛をとりて(261〔童話「畑のへり」裏表紙〕) 小田部耕二 558
- 99 方十里稗貫のみかも／稲熟れて(270〔絶筆〕) 大角修 562
- 100 ぎんがぎがの／すすぎの中さ^な立ち^たあがる(童話「鹿踊りのはじまり」から) 富山英俊 570

短歌の読書会について 宮沢賢治研究会前事務局長 山崎善男 575

宮沢賢治短歌についての主要参考文献 579

編集後記 589

凡例

* 目次には各歌の上の句をとる。

* 宮沢賢治の作品等は『新』校本宮澤賢治全集』筑摩書房による。

* 『新』校本宮澤賢治全集』は『新校本全集』と略称する。

* 引用文中の／は改行を示す。

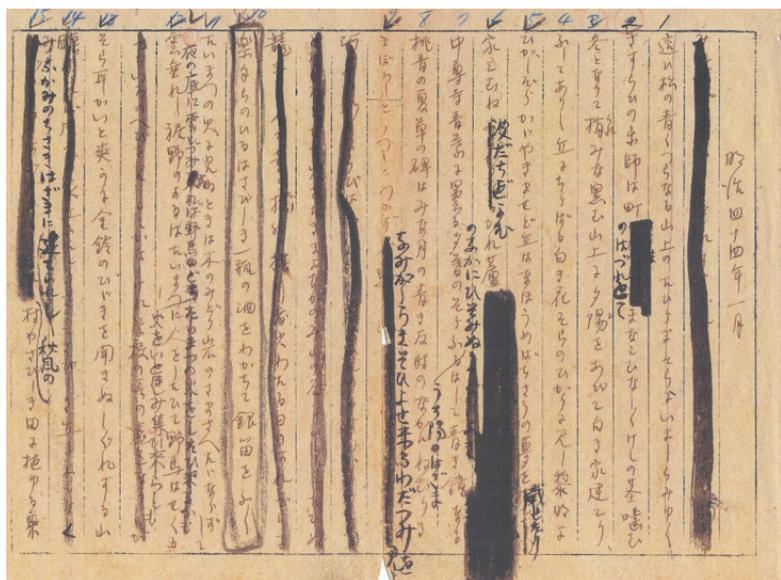
* 『新校本全集』で原文に補足されている〔 〕表記は省く。例Ⅱ〔か〕がやきて↓かがやきて

〔明治四十二年四月より〕

001 父よ父よなどで舎監の前にしてかるとき銀の時計を捲きし (歌稿B01)

栗原敦

この短歌の成立を述べるためにも、宮沢賢治の「歌稿」と題された二種の稿本について、寸描しておく必要がある。詳細は、『新校本全集』第一巻「校異篇」(筑摩書房、一九九六年)を参照願いたい。一種は表紙に「歌稿」(カコウとルビ付き)、「明治四十四年 ヨリ」、「大正九年春 マデ」と三行にわたって毛筆により賢治自筆で書かれたもの。用箋はこの表紙を含め宮沢自家製罫紙、計四十八葉。もう一種は、市販の黒クロス表紙で綴じられ、歌稿本文は「1020(広) イーグル印原稿紙」(四〇〇字詰)百七十二枚のもの。この二種を区別するために、旧『校本全集』(筑摩書房、一九七三年)以来、前者を「歌稿A」、後者を「歌稿B」と呼び習わしている。どちらも、賢治生前に印刷・刊行されるに至らず、「歌稿」のまま、稿本として残された。

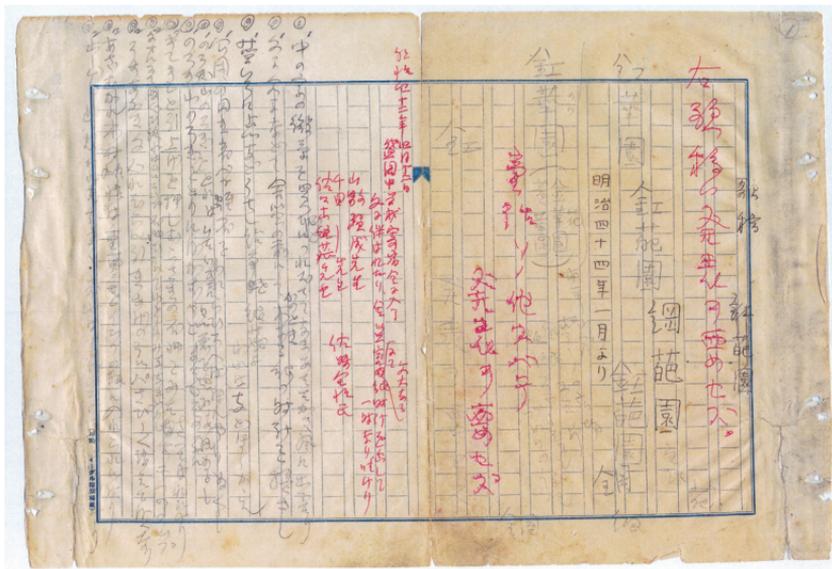


歌稿A 第2葉 (本文冒頭)

筆写者は妹トシ。手入れは賢治。資料提供：宮沢賢治記念館

「歌稿A」の筆写者は賢治の妹トシ（「歌稿」部分の四十葉まで）、その次妹シゲ（四十一葉から四十三葉の途中まで）、以降が賢治である。加筆は数次にわたっているが、トシ、シゲの筆写部分は筆写途中の誤りの訂正がほとんどで、推敲や訂正の加筆、削除はすべて賢治である。

「歌稿B」の記載はすべて賢治自身による。第一形態はブルーブラックインクで書かれている。各短歌は「歌稿A」の一行書きと異なっており、多くの歌がそれぞれの行数に分ち書きされている。年月の見出しは「明治四十四年一月より」の項から「大正十年四月」の項までである。これに対して、数次にわたる手入れが重ねられ、推敲、改作、独立した新しい短歌の挿入、文語詩への改作の跡も多く見られる。要するに、残されたそれぞれの歌の本文形態は、手入れなどの経緯を表しているの



歌稿B 第1葉 筆記は賢治自身。資料提供：宮沢賢治記念館

で、各形態がそのまま配置を示す期間に書かれた姿を示しているとは限らないことにも注意が必要である。

さて、賢治による数次にわたる手入れや追補の折に、「第一葉の左半分の余白を用いて、短歌十二首が鉛筆で追補された。題材の内容から見て、「明治四十四年一月」を遡る、賢治が岩手県立盛岡中学校に入学した一年次と二年次の体験に取材した作品であることは確実なので、旧『校本全集』編纂委員が新たに「」を付して「〔明治四十二年四月より〕」の見出しをつけて掲出することになった（『新校本全集』もこれを踏襲）。本欄で取りあげる短歌は、追補されたこの十二首の第二作目にあたるものなので、以上の経緯を説明したのである。すなわち、「歌稿B」の冒頭にこれらが配されたことから、宮沢賢治の短歌制作が、文字通りの意味でこの時期（明治四十二年四月）に始まっている、と即断するべきではないだろうとい

うことでもある。「歌稿B」がブルーブラックインクで成立した後、鉛筆による全面的な手入れが行われた際に、中学校一年次と二年次の忘れがたい記憶を元に追補されたもの、とみるのが穏やかなところであろう(注)。

賢治の祖父である宮沢家当主喜助は、息子政次郎の長子賢治が小学校を修了し次第、しかるべき商家で奉公修業させ、家業を継がせるといふ考えだった。明治維新頃に分家して、苦勞しながら徐々に質・古着商の家業を整えてきた喜助だが、十代から喜助を支えて、積極的な働きをした政次郎の支えがあつて商売の安定や発展も得られたのである。新時代の動向も熟知し、賢治の学業成績も優れていることを踏まえた父政次郎のとりなしで、喜助も賢治の中学校進学を許すことになったのだという。

入学試験開始の前日、三月三十一日には母イチが付き添って盛岡に出たというが、四月四日の合格発表、五日の入学式と続く。入学手続きなど以降は父に代わつたのかも知れない。追補された十二首の冒頭は「中の字の徽章を買ふとつれだちてなまあたたかき風に出でたり」(歌稿B0_a1)に始まっているが、学帽や徽章、制服などを整えに「つれだちて」出たのは、第二首に内心の呼びかけ対象として登場する「父」とだったように思われる。

この歌の第一形態は「父よ父よなどで舎監の前にして大なる銀の時計を捲きし」だった。時計の形状の説明(「大」が意味をも暗示してはいるが)の平板さよりも、振る舞いの瞬間(かるとき)に現れた(感じ取られた)見えない何かに対する緊迫感が、より高められている。「などで」は、なぜ、どうしてという原因や理由を問うことばだが、実際の答えを求めることよりも、嘆きや非難に近い感情の吐露、すなわち、筆者の独白なのである。

鉛筆での記入とは別に、赤インクで「明治四十二年四月十二日／盛岡中学校寄宿舎に入る／父に伴

はれたり、舎監室（の↓にて父大なる）銀時計を出して／一時なり眩けり」と書き、舎監の三教師名などがメモされており、題材となった出来事の様子をうかがわせる。さらに文語詩化の試みとして「大正四年四月」の中扉の左半分の余白を用いて、このメモに対応する文語詩「わが父よなどてかのとぎ」〔『新校本全集』第六卷「補遺詩篇Ⅱ」所収〕が鉛筆で書かれることになる。

「恩賜の金時計」が帝国大学の優等生の証しとして世に知られていたように、銀の懐中時計もまた相当の成功者の証しと見なされるもの。中学校進学への道を開いてくれた父であるが、実業者としての自身の気負いのようなものを感じさせる振る舞いとして、鋭敏な感受性の持ち主だった息子賢治に、恥ずかしさや嫌悪を伴うような違和感が印象づけられ、その後の中学時代、高農時代、そして「歌稿」が編まれる時にまで（やがては「文語詩」化に向かう時まで）、問いただしいような思いとして心に刻まれたのだっただろう。

〔注〕『新校本全集』第一巻での本文の掲出の仕方は、残された草稿の現状を説明するための必要から、他巻の詩篇や童話等の場合と揃えて、最終形を本文化して、それに至る経緯を校異によって説明するという形を採用している。しかし、「歌稿B」の最初に賢治が整えた段階の本文を掲出して、その段階を読み味わうことにも重要な意味がある。栗原敦・杉浦静編『新編』宮沢賢治歌集（蒼丘書林、二〇〇六年）では、それを見やすい形で提示し、その他、賢治の短歌の全容を見渡せるようにして、「新校本全集」での提示の仕方を補った。巻末の「宮沢賢治の短歌」（栗原）、「賢治（歌集）と短歌のその後」（杉浦）で、宮沢賢治の短歌の生成とその後についての解説を付している。『新校本全集』の校異とあわせて参照頂ければ幸いである。

方十里稗貫のみかも

稻熟れてみ祭三日

そらはれわたる 270〔絶筆〕

大角修

賢治が三十七歳の昭和八（一九三三）年九月十七日、花巻の鳥谷ヶ崎神社の秋祭りが始まった。それから三日間、神輿がお旅屋（仮に宿る場所）をめぐり、鹿おどりの行列などが練り歩く祭礼だ。この年、賢治は胸の病のために生家の二階の部屋で臥せていた。肺結核の悪化によるものだろう。

『新校本全集』第十六卷（下）の「年譜」には、祭礼の初日も二日目も、賢治は病をおして生家の「門のところまで出たり、店先にすわったり、楽しんでざわめき通る人びとや、踊りまわる鹿おどりを見ていた」という。最終日の十九日の夜には神輿が神社に還御する。賢治は門のところへ出て、夜八時に家の前を通る神輿に礼拝した。翌二十日、「前夜の冷気がきつかったか、呼吸が苦しくなり、容体は急変した。（中略）急性肺炎とのことである。政次郎も最悪の場合を考えざるを得なくなり、死に臨む心の決定を求める意味で、親鸞や日蓮の往生観を語りあう」（「年譜」）

親鸞は生家の真宗および浄土真宗の開祖で、晩年に自然法爾を説き、九十歳で没した。書簡・法語集『末灯鈔』の「自然法爾の事」に「自然」といふは、「自」はおのづからといふ、行者のはからひにあらず」（『浄土真宗聖典』本願寺出版、一九八八年）という。人には、どんな人でも救うと誓った阿弥陀仏の誓願（本願）の力がおのづから働いている。行者（念仏する人）のはからいではない。

日蓮は六十一歳で病没したが、「いづくにて死候とも、はかをばみのぶさわにせさせ候べく候（ど

こで死んでも墓は身延の沢につくるように）」（『平成新修日蓮聖人遺文集』「波木井殿御報」地人館、一九九五年）と言いついていた。身延は日蓮が晩年を過ごした甲斐の山中で、その遺言によつて墓所は身延に造られた。その身延を日蓮は「日本の靈鷲山である」と言つていた。靈鷲山は釈迦が法華經を説いたとされる山で、日蓮は久遠実成（永遠）の仏の国として「靈山浄土」とよんだ。

賢治が二十五歳の大正十（一九二五）年に日蓮主義国柱会の活動に参加しようと無断上京したころには、真宗の篤信者である父Ⅱ政次郎と激しく言い争つたこともあるが、いま、それはない。「年譜」に「死に臨む心の決定を求める意味で」とあるとおり、心の死支度をととのえるために親鸞や日蓮の往生觀を語りあつたのだろう。そのあと賢治は、一枚の半紙に二首の短歌を墨書した。

翌二十一日午前十一時半、二階の賢治の部屋から突然、「南無妙法蓮華經」と声高く唱える声があった。賢治の容体は急変し、午後一時三十分には永眠。前日に書いた短歌二首が絶筆となつた。

その第一首が標題の「方十里稗貫のみかも／稲熟れてみ祭三日／そらはれわたる」である。

四方十里、稗貫のみならず稲がよく熟した。稔りを祝う秋祭りの三日も空が晴れわたっている。

稗貫は今の花巻市あたりの郡名である。「稗貫のみかも」は「稲がよく熟したのは稗貫郡のみだらうか」と読み取ることもできるが、初句の「方十里」はきつぱりと力強い。そこから導かれるのは「稗貫のみならず、あたり一面」という感歎である。

第二首は「病のゆゑにもくちん／いのちなり／みのりに棄てば／うれしからまし」

病のために朽ちようとする命だが、みのり（稔り・御法）に棄てるのなら、うれしいことである。

賢治は十八歳のころに島地大等の『漢和対照 妙法蓮華經』によって法華經に目覚め、生涯、法華信仰に生きた。また、冷害に見舞われることも多い岩手で、無償で稲作の肥料設計をおこなうなど農民のために尽くした。今は病が重く、命が尽きることになったのだが、「年譜」には「この年は米収一三二万石を越したが、これは岩手県はじめての大収穫であった」（九月十八日）とある。まさに稗貫のみならず、未曾有の大豊作である。そのうえ祭りの三日、空が晴れわたった。

これはたまたま、その年はそうだったというのだろうか。

賢治が法華經の行者であったなら、たとえ「もうはたらくな／レーキを投げろ／この半月の曇天と今朝のはげしい雷雨のために／おれが肥料を設計し／責任のあるみんなの稲が／次から次と倒れたのだ」（『春と修羅』第三集一〇八八）というような悪天候のときでも、その心象の空には、どこかに、きれいな青空が見えていなければならない。三十二歳の昭和三（一九二八）年に肺浸潤のために病臥した時期には、血ががぶがぶ出て口もきけない状態でも、往診の医師に「あなたの方からみたらずるぶんさんたんたるけしきでせうが／わたくしから見えるのは／やっぱりきれいな青ぞらと／すきとほった風ばかりです。」（『疾中』詩篇「眼にて云ふ」）と言ったではないか。

同時に賢治は激しく動揺していた。同じ「疾中」詩篇の「その恐ろしい黒雲が」では「その恐ろしい黒雲が／またわたくしをとらうと来れば／わたくしは切なく熱くひとりもだえる」（中略）きみはかゞやく穹窿や／透明な風 野原や森の／この恐るべき他の面を知るか」と死におびえる。

この現実の両面を包摂するのが天台・日蓮のいちねんさんぜん一念三千・十界互具じゅうかいごぐの法門である。人の一瞬の心の内に無数の世界がある（一念三千）。地獄界や修羅界などの六道にも修行と仏の世界があり、互いに内

包しあっている（十界互具）。十界互具は、盛岡高等農林時代の同人誌『アザリア』第六号（一九一八年）に載せた断章（峯や谷は）にすでに表されている。

峯や谷は無茶苦茶に生まれ（中略）この峯や谷は実に私が刻んだのです。そのけわしい処にはわが獣ケモノのかなしみが凝って出来た雲が流れその谷底には茨や様々の灌木が暗くも被さりました。雨の降った日にこの中のほゝの花が一斉に咲きました。

けわしくも刻むこゝろのみねみねにさきわたりたるほゝの花はも。

又、

こゝはこれ惑ふ木立のなかならず忍びを習ふ春の道場。

「ほゝの花」は学名マグノリア、すなわちモクレン科の朴ほおやコブシの花である。賢治の作品では聖なるマグノリアだ。その花は、自分の心が刻んだ険しい峰々の茨や灌木が暗く被さる谷底に春の雨がそそぐ日に一斉に咲く。法華経「薬草喻品やくそうのほん」で説かれている仏の慈雨のように、その雨がそそぐとき、「こゝはこれ惑ふ木立のなかならず忍びを習ふ春の道場」である。

「道場」は何かの訓練場ではなく、經典では釈迦じょうぞうが成道（さとり）を得た菩提樹下をいう。そして、獣ケモノのかなしみに閉ざされた暗い谷底でも、そこが道場（さとり）であり得る。

二十八歳の大正十三（一九二四）年刊の『心象スケッチ 春と修羅』所収の詩「春と修羅」では「のばらのやぶや腐植の湿地／いちめんのいちめんの詠曲てんごく模様」の中でも、「正午の管楽くわんがくよりもしげく／

琥珀のかけらがそそぐ」し、「れいろうの天の海には／聖玻璃の風」が行き交うのだが、「ZYPRESSEN
春のいちれつ／（中略）その暗い脚並からは／天山の雪の稜さへひかるのに／（中略）まことのこと
ばはうしなはれ／雲はちぎれてそらをとぶ／あかがやきの四月の底を／はぎしり燃えてゆききする
おれはひとりの修羅なのだ」となる。その「腐植の湿地」は「かがやきの四月の底」なのだが、「ま
ことのことば」は失われ、修羅の「おれ」には聞こえない。

じつは法華経にも「まことのことば」はない。法華経は「法華経というすばらしい經典がある」と
法華経を讃えるのみで、無価の宝だという本当の法華経の内容は何も説かれていない。したがって、
われわれが読む文字の法華経に「まことのことば」はないのだが、その文字の法華経を読誦したり書
写したりする功德の大きいことは繰り返し説かれている。平安時代には、死んで地獄に墮ちたけれど
生前に法華経を書写したことがあったので閻魔大王に褒められて生き返ったといった靈驗譚が非常に
多く語られるようになった。そのころの『源氏物語』『御法』の帖には、病の重い紫の上（光源氏の妻）
が「御願にて書かせたまひける法華経千部、急ぎて供養したまふ」とある。来世の安らぎを願って僧
たちに書写させていた法華経千部を急いで完成させたというのである。このように法華経を千部
も書写したり読誦したりする一千部供養（千部会）は奈良時代に始まり、今もおこなわれている。
仏道は行学二道（事と理）を修すべきものとされるが、重要なのは、学（教理や思想）より行であ
り、実際の日々のありかたである。文字の法華経の読誦や書写を続ければ、いつかは、文底秘沈（文
の底に秘かに沈め置かれている）の「まことのことば」が見つかるのではないか。

しかし、それは無数劫の未来ともいう遠い彼方にある。法華経には、法華経によって終には至高の

さとりだという阿耨多羅三藐三菩提あうくたらしんみくさんぼだい（無上菩提むじやうぼだい）を得られると繰り返されるのだが、それは「銀河鉄道の夜」でジョバンニが求めつづける「ほんとうの幸福」のように、行くべきところを示す遠い灯りのようなものとしてある。

賢治は詩や童話を書きつづけるとともに、日々に「南無妙法蓮華經」の題目を唱え、法華經の經文を読誦した。「雨ニモマケズ手帳」には「筆ヲトルヤマツ道場觀奉請ヲ行ヒ 所縁仏意ニ契フヲ念ジ然ル後ニ全力ニ従フベシしか」（ルビは筆者補足）と記している。

「道場觀」は法華經「如来神力品」で釈迦如来が人々に「あなたがたがいるところが道場である」と告げる經文「当地是処 即是道場 諸仏於此 得三菩提 諸仏於此 轉於法輪 諸仏於此 而般涅槃ねはん」のこと。どこにいても是処が即是道場、そのまま道場（さとり場）である。右のルビは賢治が藤原嘉藤治あての葉書（書簡389）に書いているものである。そのように唱えたのだろう。

賢治は「道場觀」を誦し、「奉請（諸仏の來臨を請う文）」を唱えて、その作品が諸仏の心になかうように念じた。してみると、詩や童話を書くことが賢治の仏道であった。だから賢治は母に「この童話は、ありがたいほとけさんの教えを、いっしょけんめいに書いたものだんすじゃ。だから、いつかは、きつと、みんなでよろこんで読むようになるんすじゃ」と語った（「年譜」九月二十日）。

しかし、それは迷いの道でもあった。賢治は死去する数日前、父に「この原稿はわたくしの迷いの跡ですから、適当に処分してください」と言った（「年譜」九月二十日）。

じつさい、賢治の作品には、前掲の（その恐ろしい黒雲が）などに見られるように大きなゆらぎがある。日蓮が本門の題目とした妙法七字の「南無妙法蓮華經」さえ、『春と修羅』の「オホーツク挽歌」

では「ナモサダルマプフンタリカサストラ」とサンスクリットで言い換えてみた。大きな逸脱である。また、科学者であった賢治は、町や農場、林や空などの森羅万象の奥にある神秘（西洋の哲学や科学思想で神の理性とよぶようなこと）を「たゞどこまでも十力の作用は不思議です」（童話「虔十公園林」）等と言ったが、いわゆる科学と信仰を一致させることも課題だった。

そうしたゆらぎの末に今生での最期を迎えた九月二十一日、賢治は「なにか言っておくことはないか」と問うた父に、表紙は朱色にして国訳妙法蓮華經一千部をつくってほしいと言い、「私の一生の仕事はこのお経をあなたの御手許に届け、そしてあなたが仏さまの心に触れてあなたが一番よい、正しい道に入られますように」と書き添えてくれるように頼んだ（「年譜」）。

前述の法華經一千部供養は、そのような難行をしなくても念仏もしくは題目によって全てがみたされるとする親鸞や日蓮の教えにはそぐわない。しかし賢治は、やはり日蓮以前の平安時代からおこなわれてきた法華經の埋經まいきょうを企図したメモ「経埋ムベキ山」を「雨ニモマケズ手帳」に記している。賢治の法華經一千部にも、そのような文化伝承の力が働いているのだろう。また、経本の表紙を朱色か赤にするのは「血染めの聖教」の逸話を伝える真宗・浄土真宗の習わしなので、そこに父と共にある思いを込めたのだろうか。

この遺言によって、没後、朱色の法華經一千部がつくられて縁故の人々に配られた。受け取った人のなかには、法華經にさほど関心はなかったり、「正しい道に入られますように」という言葉に戸惑ったりする人もあっただろう。宗教にありがちな独善だとも思われたかもしれない。

それでもよい。届けた法華經が機縁となつて、「いずれはもろともに、善逝スガタの示された光の道を進

み、かの無上菩提に至る」(童話「雁の童子」、善逝は如来の別称)。法華経「常不輕菩薩品」では、不輕菩薩を石や杖で打った人々でも、それが縁になって、二百億劫の後に仏と値い、法華経を聞くことができたのだから。

賢治は二年前の昭和六(一九三一)年に記した「雨ニモマケズ手帳」紙片の短歌「塵点の劫／をし／過ぎて／いましこの／妙のみ法に／あひまつりしを」という思いを、ふたたび絶筆二首に託した。その二首の初句「方十里」は、果てしなく平らで「平正にして丘坑有ること無し」(法華経「授記品」という仏の国につながる。經典に説かれる仏の国は、古代の寺院や金剛界・胎藏界の両部曼荼羅のよりにきちんと方形をなす。今は稗貫のみならず方十里、どこまでも黄金の穂波である。

この秋祭りの三日、気象庁の記録によれば盛岡の降水量は0mmだったが、雲量の記録はない。花巻は快晴だったかどうか。たとえ雲が多くても、賢治の心象は「み祭三日／そらはれわたる」であった。そして、今の命は尽きても、みのりに棄てるのなら、その先に透明な光の軌道が延びている。その思いを賢治は絶筆二首の結句「うれしからまし」にこめたのだろう。

むかしは死に臨んでまなざしを来世に向けたものではあるが、このような安心(あんじん)に臨む心の決定」を得ることは難しい。「年譜」によれば、その臨終の日、父は「おまえもなかなかえらい」と賢治をほめ、賢治は弟の清六に「おれもとうとうおとうさんにほめられたもな」と言った。それから母に「おかあさん、すまないけど水コ」と水を乞い、うれしそうに飲んだ。そして、オキシフルをつけた綿で首やからだをふき、「ああ、いいきもちだ」「ああ、いいきもちだ」と繰り返し、そのオキシフル綿がぼろりと落ちたとき、潮がひいていくように賢治は逝った。



地人館

宮沢賢治研究会 The Miyazawa Kenji Society

[評釈] 宮沢賢治短歌百選 編集委員会

編集委員長 大島丈志

編集委員 村上英一・大角 修・坪谷卓浩・松岡康子

ひょうしゃく みやざわけん じ たん か ひやくせん
[評釈] 宮沢賢治短歌百選

みやざわけん じ けんきゅうかい へん
宮沢賢治研究会 編

初版発行 2023年8月31日

発行 ち じんかん
地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7939

<http://chijinkan.com/>

©2023 The Miyazawa Kenji Society